

# 白山麓石川県白峰村河内のコシキ作り

—焼畑民のブナ林利用の具体例—

橘 礼 吉

## MAKING KOSHIKI AT KAWACHI IN SHIRAMINE VILLAGE AT THE FOOT OF MT. HAKUSAN IN ISHIKAWA PREFECTURE

Reikichi TACHIBANA, Ishikawa Prefectural Museum of History

まえがき—コシキと生産地のあらまし—

コシキとは、石川県手取川源流域すなわち白山麓の焼畑山村で作られていた除雪具の雪かき板のことである。コシキには4種類があり、その名称・形・機能は表1・写真1で示した。

ブナ・トチを原木として、ろくろを使って木製品作りをする木地屋の実態は、多くの研究者により調査されてきた。コシキは雪の民具であり、日本の多雪地域は北部に、それも日本海側にあるので、

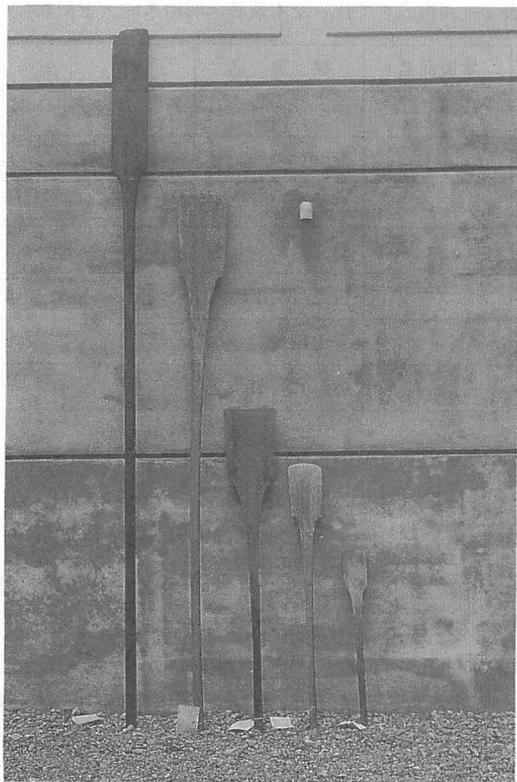
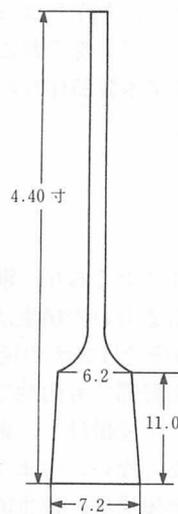


写真1 コシキの種類

左より長コシキ(2本)、中コシキ、杖コシキ、子供コシキ  
(石川県立白山麓民俗資料館所蔵)

表1 コシキの種類と中コシキの規格(下)

種類	用途
ナガコシキ(長)	茅屋根の雪おろし、特に棟や下半部に使用、注文生産
チュウコシキ(中)	屋根・吊橋・道路の除雪、雪の下の野菜掘りに、規格があった
ツエコシキ(杖)	狩猟・新道・夜の雪道に使用
コドモコシキ(子供)	幼児の雪遊びに使用



おのずとコシキ生産地も限られてくる。コシキの原木はブナである。多雪地域のブナ帯で、除雪具のコシキや鋏の柄作りにたずさわってきた人々は、その集団が数少なく、その生産地が常識的な居住条件より極寒の高冷地であったせいで目立たず、従来の調査研究は数少なく、滝沢秀一（1971）、天野武（1975）、池田享（1978）三氏の報告がある。

白山麓は、日本の深雪地域の最南縁に位置し、また白山の広大な裾野にひろがるブナ林は、日本海側のブナ林の特色をもつ代表的な原生林でもある。この報告は、多雪地域の必需品であったコシキが、深雪地域の南縁に位置する白山麓のブナ帯で、誰が、どこで、どのようにして作っていたかを生態的に記録することを意図した。

手取川本流は、石川県白峰村付近では「牛首川」という。牛首川右岸の宮谷、左岸の小三谷より上流、分水嶺県境までの山地領域を「河内」とよぶ。かつて河内には、市ノ瀬・赤岩・三谷の焼畑集落（永移出作り群）があり、総称して「河内三ヶ」とよんでいた。河内三ヶは、越前平泉寺の白山神社を起点とした越前禅定道の途中にあり、平安時代初期にひらかれた村だとの伝承がある。

大正初期における河内三ヶの戸数は39戸、その内訳は市ノ瀬10、赤岩19、三谷10戸であった。昭和31年調査時では市ノ瀬6、赤岩6、三谷9に減少した（加藤，1973）。現在は市ノ瀬に、夏季登山用旅館や砂防・国立公園等の管理事務所が開設されるに過ぎず、赤岩・三谷は高度経済成長期に、過疎離村で廃絶した。

河内三ヶの生業は、焼畑によりヒエ・アワ・ソバ・ダイズ・アズキ等の食糧を自給し、副業としてコシキ・鋏の柄等の木製品作りをした。広大な山地を後背地にもつから、木製品作りの原木に恵まれていたと思われがちであるが、私有林は古くから焼畑用地として伐採し、これを利用してきた関係で良い原木は殆んどなく、共有林や国有林が原木供給地であった。共有林・国有林の森林は、おおむねブナ帯である。河内では、コシキだけを作ったのではなく、「クワボウ」とよぶ鋏の柄を中心に、多くの木製品を作っていた。その製品の一覧は表2で示した。

紹介する河内のコシキ作りは、白山麓の最奥集落、最高地の焼畑民が、ブナ帯でおこなってきた林野利用、とりもなおさず木製品作りの一部門の実態についての報告である。

表2 河内三ヶで作った木製品（明治末～大正初期）

木製品名	標準名	材質
コシキ (コスギ)	木鋏板	ブナ
クワボウ (クワガラ)	鋏の柄	加賀地方はブナ 越前地方はミズナラ
ゲタ	下駄	サワグルミ
カサギ	桧笠の材料	ヒノキ
コンゴウツエ	白山登山の杖	ヒノキ、サワグルミ ブナ、スギ
タイマツ	登山用たいまつ	ヒノキ ネマガリゲタ
メンパ ゼン・ボン	曲物食器	ヒノキ

### コシキ山の立地条件

コシキの原木はブナであり、鋏の柄の原木は加賀地方はブナ、越前地方はミズナラである。市ノ瀬より別山への登山道沿いの植生は、下段床付近ではサワグルミ・トチが優勢、中段床ではミズナラ・ブナが優勢、上段床ではブナの純林となる。さらにチブリ付近ではブナにダケカンバが混ざってくる。木製品作りは、平野部でも山地であっても原料立地が原則である。だからコシキ作りを目的とする時は、ブナの純林に小屋掛けし、鋏の柄作りを主眼とする時は、ミズナラ・ブナの混ざった森林に小屋掛けしなければならない。つまり木製品作りの小屋は、良い原木がある場所に建てられるわけで、おのずと生産地・小屋場は、植生的に固定する傾向となる。河内地方では、コシキの生産地・小屋場を「コシキ山」、鋏の柄の生産地・小屋場を「ボウ（棒）山」とよんだ。

コシキ山は、植生的にはブナ帯にあり、具体的地名で表現すれば、別山への登山道下部の段床やチブリ、登山道砂防新道の下飯場、岩屋俣谷筋は三石やゲジロ谷出合、牛首川本流筋ではマンゾウ山や、小三谷・チュウナイ谷の各源流域、三谷筋では西俣谷のヨモギ平・中俣谷の岩の山等である(図1参照)。

これらのコシキ山を海拔高度で示せば、最低部はマンゾウ山 1050 m、最高部はチブリの 1800 mに相当する。この地域の最深積雪量は 5 m を超し、冬季にはコシキ山は雪に閉ざされ完全に孤立する。

コシキ山は、冬季も宿泊して生産活動を続けるため、二つの必須条件があった。第一は厳冬季の渇水期にも水が得やすいことである。多積地域では、夏の渇水期より、冬の低温で雪が融けずに水が枯れる方が多いのである。コシキ山では、水は飲料水として大切であることは勿論、コシキ作りにも重要な役割をした。谷川・清水の水を、樋で引水し小屋内のフネで貯水する。木製品作りには、多くの刃物を使う。刃物を研ぐ際には水(研水)がなくてはならず、小屋内では職人2人が一つあて、ブナ製のトミズバチを作り、水を常時用意した。このトミズバチは、いろいろの用心水を兼ねていた。いろいろの火は、暖房・照明・炊事にはなくてはならぬが、火はコシキの乾燥と、コシキを銚色に着色させるため、最後の仕上げ工程では不可欠のものであった(詳細は「コシキの作り方」でのべる)。そのため、コシキ山ではいろいろの火は絶やすことはできないが、反面危険度が大きく、用心水が必要だったのである。夏冬、常時水が枯れないかを探る方法は、水源地の石をまくり、サンショウウオメ(ハコ

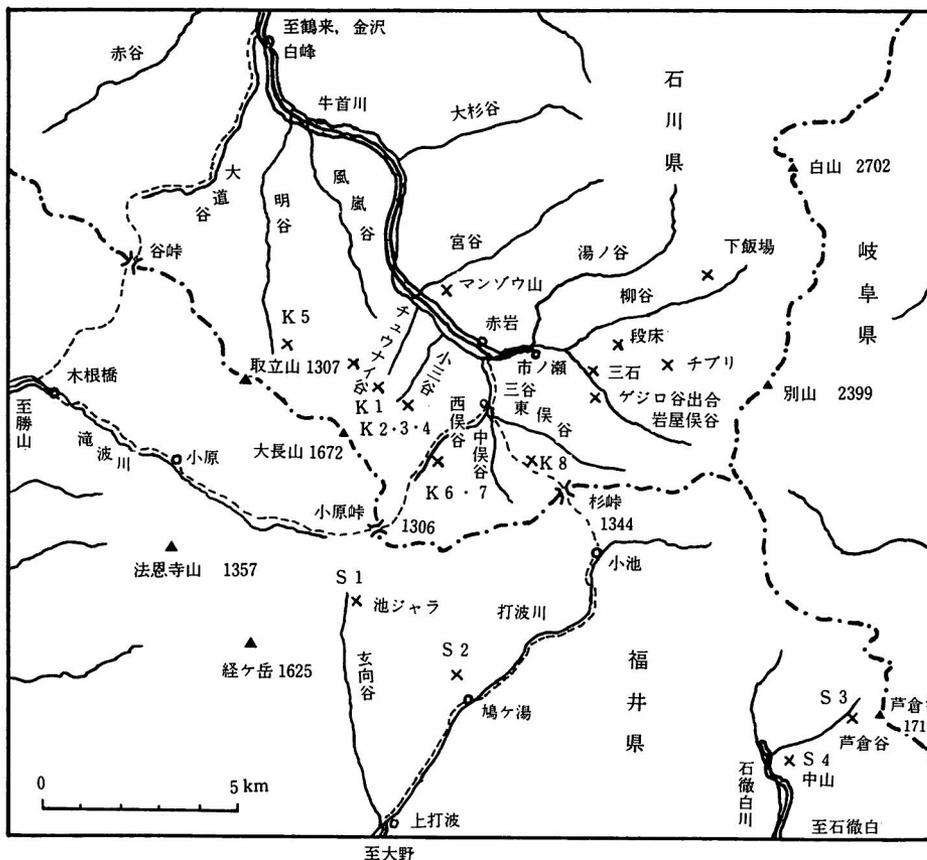


図1 河内三ヶと周辺のコシキ山 (昭和27年頃)

× コシキ山  
 K 1 加藤正信家の棒小屋, 数字は移動順を示す  
 S 1 鈴木与三松家の棒小屋, 数字は移動順を示す

写真2 <sup>かみだんところ</sup>上段床のブナ原生林 (海拔 1,550 m)

ネサンショウウオ)がいるかを確認、生息が確認できれば、年中水が供給されるとして、取水場所に決めたという。

第二に、冬場に「アワ」という新雪表層雪崩の危険場所を、極力さけることである。アワは、発生時間・場所が予想できない厄介な雪崩である。アワ発生地は、雪の衝撃力で木が育ちにくく、草だけの植生になっている場合が多い。そこで、山菜等の草しか生えない「ナバタ」という斜面、「カリボシカベ」という雌茅めがやの群生急斜面が上部にあると、その下部には小屋は建てなかった。地形的には、急傾斜地の下方部は、一般的に雪崩の被害地としての危険度が高いから、斜面上部に「アカカベ」という岩壁・岩場、「ヌケカベ」という崩壊地、「ヌケッポ」という新しい小崩壊地があれば、小屋場として避けた。明治末、赤岩の慶次郎家の小屋は、アワのため倒壊しその際いろいろから出火して燃え、救助者の前で親子が焼死するという悲惨な事例が語り継がれ、アワに対しては慎重になり過ぎるほどの配慮をしていた。

#### 棒小屋 —— 2・3年でコシキ山を移動する ——

**名称** 木製品作りのため、ブナ林にこしらえた小屋を「ボウ(棒)小屋」といい、時には「カセギ小屋」ともいう。河内では鋏の柄を「鋏棒」とよぶ。棒小屋の呼称は、コシキと鋏の柄が、同じ小屋内で並行して作られていた一つの証であると思われる。カセギ小屋の名称は、小屋でおこなわれた木製品作りが、現金収入源として家計上重きをなしていたことを裏付けている。

**種類** 構造は「ネブキ小屋」とも「ナバイ小屋」ともいうもので(橘, 1984)、地面に直接屋根をおいたいわゆる天地根源造りに似た原始的な小屋である。棒小屋の九割はネブキ小屋で、5年以上も同じ場所でコシキ山をする場合は、柱を建て上げた一般的構造の「アジアゲ」にした。

ネブキ小屋にした理由は、一つの棒小屋で2・3年木製品を作り、次のコシキ山へ原木を求めて移動するため、あくまで仮設であったためである。他方、棒小屋は5m以上の積雪地に建つため、ネブキ構造がアジアゲ構造より、耐雪構造で優れていたことも、一つの理由であった。

冬場雪の中でのコシキ作りは、1人でおこなわれることは少なかった。理由は、原木を伐採すれば

雪中に埋まり、その雪上運搬には単独の力ではやりにくく、2人おれば便利よかったからである。木製品作りの共同作業の人数は、2人、4人、6人と偶数组でおこなう慣行があった。だから棒小屋は、その組人数に応じ「一人小屋」「二人小屋」「四人小屋」「六人小屋」とよんだ。3人・5人の時は、1人分の空白部ができるが、物置きや台所にあてていた。時には、小屋の代りに「二人帳場」「四人帳場」の例のように、「帳場」という言葉を使うが、小屋を意味していることには変りない。

しくみ 棒小屋の正面図は図2・Aで、平面図は図2・Bで示した。



写真3 ネブキ（ナバイ）小屋の外観  
（石川県白峰村赤岩の作り小屋、昭和59年）

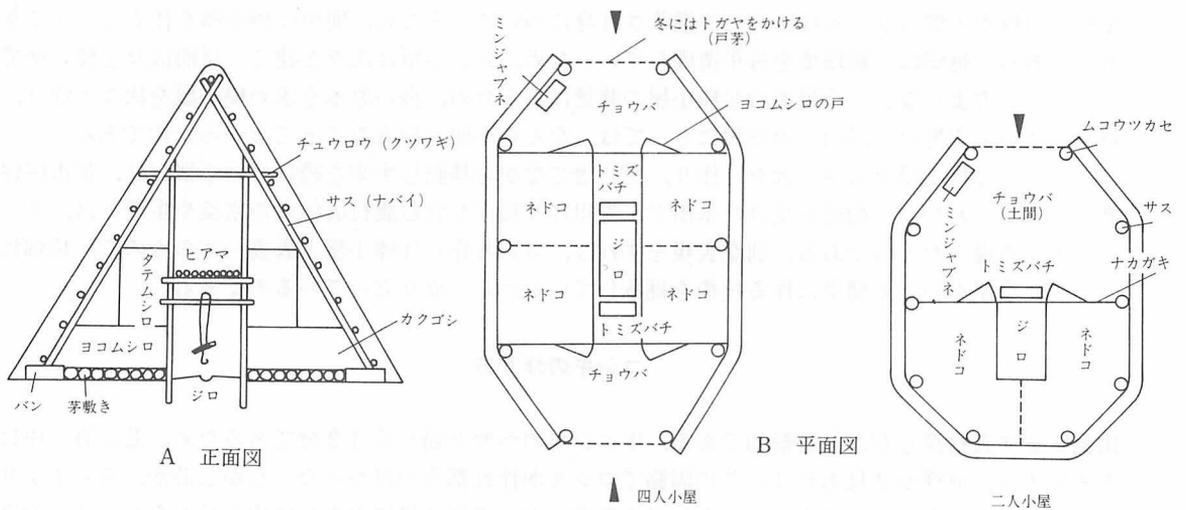


図2 棒小屋の正面図・平面図

二人小屋のサスの長さは約15尺、正三角形になるように組み、ネソ(マルバマンサク)で結束する。サスはその基礎に、「パン」とよぶブナを部厚く割木したものを置く。入口は一方向だけで、入口側の土間部は「チョウバ」とよぶ細工場にあって、居住空間は「ネドコ」とよび茅敷きとした。中央部奥寄りに「ジロ」とよぶいろりを組み、約4尺の高さに火棚をこしらえ、製品の乾燥場にあてた。

チョウバとネドコの境を「ナカガキ」という。チョウバへの出入口部は、箆を横にし、横開き戸のようにしたヨコムシロ、その上部に箆を縦に下げ、朝晩に巻き上げ下げするようにしたタテムシロをつける。箆の上部のナカガキは、サワグルミの皮や茅で仕切って、冬季に暖かさが逃げないようにした。

四人小屋は、入口方向が二つである。一方に水を貯えるフネを置き水屋機能をもたすと、反対側入口の屋外に便所を仮設した。一人分のネドコの広さは約1坪弱、「水に遠い」「便所に近くてくさい」等、場所をめぐる平等とはいかず、「長一」「長二」「長三」「長四」と長短4本の枝でくじを作り抽せんで決めた。各自は、自分のネドコの脇のチョウバで細工仕事をし、カクゴシ部分にふとん・持物・道具類を収納し、ジロに足を向けて寝た。

小屋作り 小屋作りは、晩秋、焼畑の一連の収穫作業が終了した後におこなった。親子組の二人小屋の時は、コシキ山の小屋場へ家族総出で出向き、男は小屋場を水平にする屋敷ごしらえ、サス・ムコウツカセ等の原材料の選択・伐採に、さらに結束のためのネソ等を現地調達した。その間、女は茅刈りとその運搬に精をだした。茅場は、焼畑放棄地に群生地があり、コシキ山はより高いブナ林にあるため、海拔高度の低い茅場よりブナ帯の小屋場へ、茅をかつぎあげるのが苦労であった。二人小屋は、家族4人で材料調達に2・3日、サスの組みあげ茅を葺くのに1日、合計3・4日を費して建てた。仮設小屋にせよ、特に自家労働で、すべての材料を現地調達し、僅か数日で完成させる生活技術は驚きである。

コシキ作りの良い原木が、非常に少ないことが関係し、同一棒小屋の使用年は2年が普通で、長くても4年であったという。河内の焼畑民は、焼畑先に野生動物の被害を防ぐ番小屋と、休み小屋を兼ねてシシ小屋を建てる慣行がある。このシシ小屋の材料は現地調達で、自前で建てている。このシシ小屋作りの技術・慣行が、永代にわたり継承され身につけているため、簡単に棒小屋を作ることができるのである。焼畑は、新畑地を毎年造成していくため、シシ小屋は次々と建て、反面次々と使い捨てていく。このようなシシ小屋慣行が棒小屋の背景にあるため、良い原木を求め棒小屋を次々と作り、移動していく実態は、河内の焼畑民にとっては、なんら不便で厄介なことではなかったのである。

このような棒小屋を山中に次々と作り、使い捨てながら移動し生業を続けていく慣行は、都市居住者や、永代にわたって相続を受けた水田で、先祖代々稲作を営む農村居住者の常識や生活とは、まったく次元の違ったものである。別な表現をすれば、コシキ作りは棒小屋と表裏一体のもので、焼畑民がネブキ小屋をいとも簡単に作る技術を継承しているから、成り立っているのである。

### コシキの作り方

山見 まず良材探しが、一番最初である。中コシキのヘサキ幅が7寸2分であるため、芯が真ん中にある原木は、直径が2尺あれば、芯の両脇でコシキが作れ都合が良かった。しかし芯が、真ん中よりずれていることもあり、できるだけ太いブナを選んだ。直径3尺以上あれば申し分がなく、こんなブナの樹令は350年以上だという。

巨木に目をつけ、次にマサウチをする(図3参照)。かまぼこ状の木片を見本に取り出し、ホイチ(鈍)で割って適否を判定する。スパッと割れた木は「一枚<sup>キ</sup>柱」といって適材、割れない木は「スグレ」と

いって不適材である。

ブナ・ミズナラ等の芯と年輪は、傾斜地の時は谷側に寄る性質がある。そして年輪と年輪の間は、谷側が狭く、山側が広がる性質である。だから原木は、緩傾斜地か平坦地のものは、芯が中央部にあり、年輪も円形になる。風の強くあたる場所の原木は、「モメワレ」という細かい筋が縦方向に走って不適材が多かった。したがって、コシキ山での良質のブナ原木は、地形的には緩傾斜地か平坦地、気象的には風当りの弱い場所か風下地に生えるものが最適だったのである。ブナ林に立ち入り、ブナの良材を選別する仕事を「ヤマミ」としている。

公有林のブナ利用 私有林は長らく焼畑用地に利用してきたので、良材はなかった。ブナの良材は、焼畑の高距限界をこえた部落共有林・国有林・白山比咩神社の社地内にあった。

河内の共有林面積は約180町歩、市ノ瀬は「湯の谷共有」、赤岩は「高山共有」、三谷は「西俣共有」「中俣共有」とい、所有名儀人は市ノ瀬は笹木源五郎家、赤岩は薄重太郎家、三谷は林七蔵家になっていた。共有林の実質管理は総代が担当し、市ノ瀬は笹木兵左衛門家、赤岩は加藤与三郎家、三谷は永井辰家であった。総代は、原木利用願いが出されると、10本以内であれば総代3人の権限内で処理した。具体的には3人が一緒にコシキ山に登り、実地に原木の大小・良悪を檢視して、原木代すなわち「株代」を決めた。一冬、一人が必要とする原木は、直径2尺以上の一枚柱であれば2・3本であった。

株代は、薪の時は1坪（6尺立方の客積）、木炭は1俵、用材は1石、コシキ・鋏の柄は原木1本を各単位として換算した。因みにコシキの株代は、出荷額の約1割に相当する費用であったという。河内では、株代を貯え区費、すなわち吊橋の修理やかけ替え、冠婚葬祭等に充てていた。

国有林への利用願は、手続き書類が複雑なので申請ができにくく、赤岩の薄重太郎家や三谷の林七蔵家が代筆業務をおこない、営林署の許可を得ていた。大正8年以降、書類手続きが簡素化されたのを機に、利用が多くなったが、それでも少なかった。昭和9年、手取川大水害が起り、河内は土石流で大被害を受け、市ノ瀬では一家全滅の悲惨な家もあった。この年、河内三ヶは営林署に大水害事情を陳情し、西俣谷上流のヨモギ平のブナ林特別利用の下付を受け、一挙に88本のブナ材の払い下げを得て復興資金の元とした。以後営林署との交渉も活発となり、国有林利用が増えたという。

別山登山道の段床・チブリ周辺の林野は、明治以降、石川県鶴来町の白山比咩神社の社地となっていた。社地内のブナ利用の時は、白山開山の祖泰澄を先達したと伝承される笹木源五郎家（市ノ瀬）に通知して、コシキ山に出むいた。

社地内のコシキ・鋏の柄は、必ず4月節句には、棒小屋より下りてきた。河内の節句の日取りは、区会の総意で決めた。雪の少ない年は4月10日、雪の多い年は4月12日か13日が一般的であった。河内では、春の節句の日が決まると、棒小屋での木製品作りは節句で区切りをつけ、前年に伐採した用材や薪を雪上運搬する春木山の仕事も節句でけりをつけた。そして節句で一休みした後、棒小屋での組を解き、熊狩りの組を作って狩りを始める慣行であった。株代は、運ばれてきたコシキ現物と申請のあった原木本数を勘案して、笹木源五郎家と加藤与三郎家の2人で協議して決めた。神社の社地内の原木代は、何か伝統的に「株代」といわず「山手」という。社地の山手は貯え、市ノ瀬からの白山登山道の維持管理費、具体的には道なおしや夏草刈り等の人夫賃や、白山室堂の修繕費に充てていた。

ここで注目すべき点は、白山の登山道や宿泊施設室堂の管理費が、社地内の原木代利用費を充当していたことである。このような白山信仰に関する道路・室堂の費用が、麓の焼畑民の木製品作りの杣取料でまかなわれていたことは、この慣行の起源とのかかわりで今後も調査を続けたいと思う。

製作工程と用具 製作工程とそれに必要な用具は、表3で示した。この資料は天野武氏の調査による

もので(天野, 1975), 体験者の多くが他界され貴重である。要約すれば, 直径3尺近いブナ立木を伐採し, 根元の太い部分の中コシキの規格4尺4寸に横切りし, ついで四つ割にし, 図3のようにヨキ・

表3 コシキの製作工程とその用具 (天野武「白山麓の除雪具」1975による)

仕事場	工程名	使用の道具
キ ヤ マ (現 場) ↓ コ ヤ (小 屋)	1. マサウチ	ヨキ, ホイチ, セナカテ
	2. ヨキドリ	ヨキ
	3. キリタオン	ヨコビキ
	4. コロギリ	シャクザオ, ヨコビキ, ガンド, キヤ, カケヤ
	5. ホタワリ	ヨキ, ワリホイチ, カケヤ, キヤ, ノトヤ
	6. アラバツリ	アラガタ, ヨキ, マサカリ, スミツボ, スミサシ
	7. ホタハコビ	ワラバト, ニナワ, ネンボウ, テゾリ
	8. タテビキ	オガ, スミサシ, スミツボ, スミイト, カスガイ
	9. カンナガケ	カンナ
	10. コシアゲ	カタイタ, スミサシ, スミツボ, スミイト, マサカリ
	11. カタクリ	カタクリナタ
	12. カンナガケ	エーコキカンナ
	13. コシキホシ	

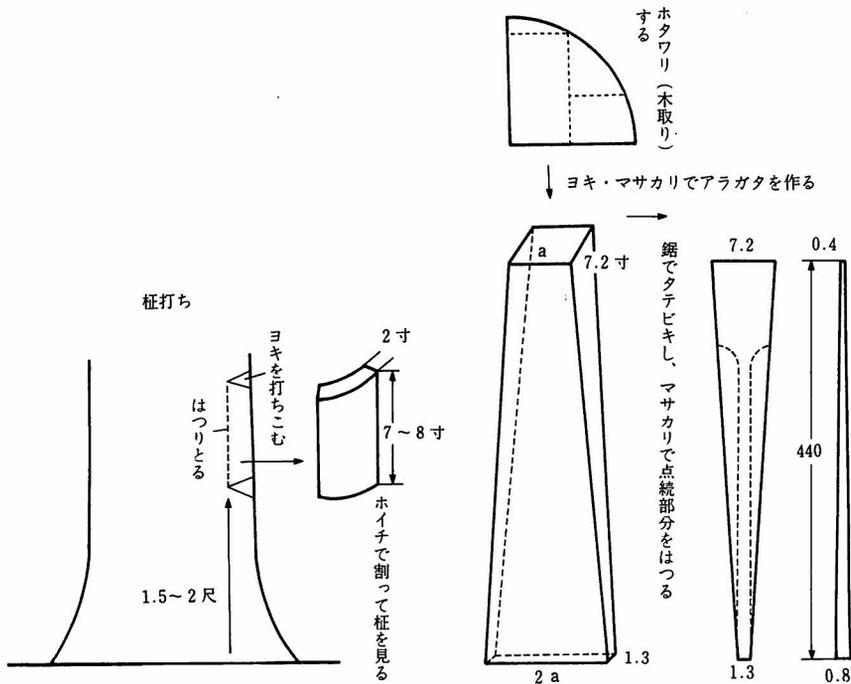


図3 コシキの作り方のあらまし (「石川県山林誌」の原図より)

マサカリではつる。次に鋸で板挽きした後鉋<sup>かん</sup>をかけ、点線の部分をマサカリではつって仕上げる。

コシキ作りは、冬場の農閑期が中心で、棒小屋の位置は、殆んどが海拔高度 1000 m を越えているため、厳冬期のブナは、木の中の水分まで凍っている。日中は平均して 0 度前後、寒い朝はマイナス 15 度位に下り、極寒の中で仕事をした。雪中でブナを伐採すれば、原木は雪の中に深く倒れこみ、掘り上げるのに大苦勞であった。

棒小屋より上部で伐ったブナは、トチ金<sup>かひ</sup>を使って引き下ろす。下部で伐ったブナは、かつぎ上げる。この際トチ金にはマフジの蔓を繋ぎ、かつぎ上げる荷繩にもマフジの蔓を、共に繩代りに使った。低温では、藁製やマニラ麻製の繩には雪が次々に付着して太くなり、繩として使用できなかつたのである。

凍ったブナ原木を割る時は、金属製矢はまったく用をなさず、イタヤカエデの木製矢を使わねばならなかつた。

極寒の日には「ホイチ・マサカリ・ノコの刃の中の水が凍る。」とあって、刃物仕事をひかえた。寒い朝、凍ったブナに刃物をあてると、刃こぼれが激しく直すのに手間がかかり、仕事を休み気温が高くなるのを待った方が得策だったのである。コシキを作る焼畑民自身、「鋼<sup>はがね</sup>の中に水分があり凍る。」とは信じてはいなく、「刃の中の水が凍る」と表現して「金属の低温脆性<sup>ていせい</sup>」を意味させたものであろう。

それにしても多雪・低温のもとで、便利なマフジの蔓、有効なイタヤカエデ製の矢を使う技法と、極寒の日には鋼<sup>はがね</sup>を暖めてから使う慣行は、長い試行錯誤の結果生みだされたもので、多雪・最高地の焼畑民ならでの木製品作りの技術として、高く評価すべきであろう。

コシキ作りの最終工程は、乾燥である。ヒアマとよぶ乾燥台の上で、コシキを縦方向に並べ乾燥させる。製品が生木のため、火力で熱せられるとブナの樹脂は、表面に泡状になって滲み出てくる。それが煙と反応して飴色に変化してくる。この色を「イタギ色」という。イタギ色にするため燃やす木は、ブナの芯材が最も効果があり、はつり作業時芯部分の廃材は捨てないで、乾燥用の燃料に貯えた。イタギ色になったコシキは、商品として見栄えが良く、虫がつかず、除雪時には雪が付着せず機能的にも良かった。天野武氏も「コシキホシは特に重視する必要がある。」との観点を指摘されているが(天野, 1975)、まさに同感である。

## コシキの出荷

コシキの流通は、河内の流通と無縁ではなく、その一部であった。コシキを含む木製品の出荷・取引の実態は、車道開通以前の白山麓の最奥・最高部の山村の流通がどのようであったかを知る具体的資料として興味がある。

三谷の山林地主であった林七蔵家は、代々七蔵を襲名し、現当主は 28 代目にあたる旧家である。林家の「大正 2 年 11 月改大幅帳」は、河内の各農家と林家との間における物資の貸借を、日誌的に記録した台帳である。この記録によれば、各農家は林家より米・大豆・塩・酒・茶・糶・煙草・塩魚・石油類等の日用生活品を求めている。対するに各農家は、林家へ鋏の柄・斧の柄・コシキ<sup>にしき</sup>・楡の皮・黄蓮<sup>わうれん</sup>・熊の皮・熊の胆・ワサビ<sup>わさび</sup>・平葺<sup>ひらつき</sup>(ムクゴケ)等を納めている。つまり河内の林野生産物は、山林地主の間屋的商業活動を通して、各生産者より日用品と物々交換する形で集荷され、消費地へ送られたのである。

林家は大正 13 年まで、日用生活必需品の移入は専ら、小原峠越えのボッカ運搬に依存し、専属のボッカが福井県谷村にいた。福井県勝山から小原峠経由の移入品をアガリ荷物とよび、ボッカは林家で一泊し、帰路のカエリ荷物すなわち移出品に、コシキ・鋏の柄等を運んだ。要約すれば、林家は河内

の約40戸を対象に、繭・衣類を除く生活必需品や木製品の商業・運搬活動を独占的に営業していた。因みに大正13年とは、手取川本流に沿って車道が、石川県鶴来町・尾口村・白峰村白峰・河内へと完成した年である。この年を境にして手取川沿いに馬車交通が発達し、河内に流通革命が起った。

コシキを作る焼畑農家は、根雪前になるべく多く米・味噌を棒小屋まで自家運搬せねばならない。この時の米、味噌は、商慣行にしたがい山林地主林家より前借りで求め、コシキ・鋏の柄等の林産物で盆・暮の2回で清算した。だからコシキは、米・味噌を前借りした時点で、自動的に出荷先は山林地主と決まるわけである。

福井県勝山・大野、石川県小松・鶴来の荒物屋が、河内に直接来て山林地主を介せず、焼畑農家と取引する時もあった。この時は、焼畑農家へ在地山林地主に代って、外来荒物屋が米・味噌代を手付金として前貸しする慣行であった。だから秋コシキ山にはいる際、外来荒物屋より手付金を受けた時点で、翌春のコシキの出荷先は白峰村以外の地に決ったわけである。

三谷の山林地主林七蔵家は、商業活動を営んでいたことはすでに紹介した。山林地主とは常識的には「多くの雇人で、大規模な植林経営をする。」と思いがちであるが、河内の山林とは植林用ではなく、焼畑用地としての山林であるから、河内の山林地主とは「焼畑地主」ともいうべき性格のものである。山林地主側では、焼畑用山林・屋敷地・住宅の三者をあわせて借り受ける者を「ジナゴ」といい、三谷9戸中、ジナゴは3戸であった。

大正2年の大幅帳で、三谷9戸の全農家と林家との物品貸借関係を調べると、全農家9戸が赤字である。すなわち9戸は、山林地主へ幾らかの借金を負っていることになる。別な表現をすれば、山林地主は9戸の焼畑農家との間に、焼畑地としての山林貸借関係や、大幅帳上の貸借関係が存在していたので、9戸の農家には社会的・経済的に優位にたっていたので、林野生産物の集荷もやりやすく、完全に掌握していた。市ノ瀬・赤岩のそれについても8割方を支配していた。

現存するコシキに関する統計は少なく、表4で示した。古い記録では、慶応2年(1866)の生産額は1500丁(1丁とは1枚)である(山岸十郎右エ門家所蔵文書より)。明治43年、越前地方へ1万枚、加賀地方へ5千枚が移出されている(白峰村, 1959)。林七蔵家の「大正3年売買帳」と「明治44年石川県山林誌」によれば、福井県側は勝山の荒物屋を経由して福井・武生・

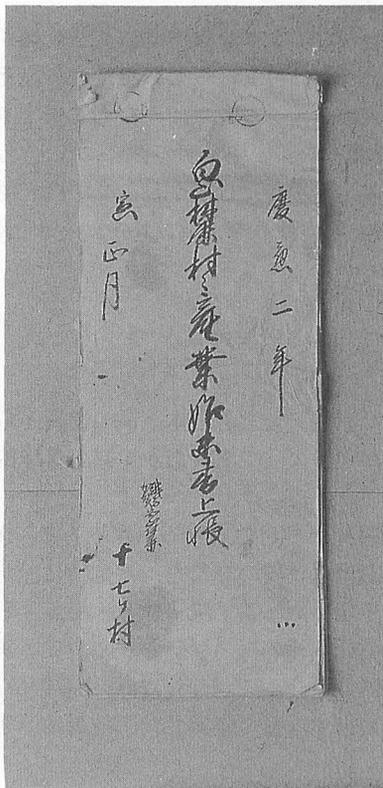


写真4 コシキ・鋏棒の生産数が初見できる  
「白山麓村々産業始末書上帳」  
(白峰・山岸十郎右衛門家所蔵文書)

表4 石川県白峰村のコシキ生産統計

慶応2年(1866) (山岸家文書より)	1500丁 (コシキの単位は古くは丁、次いで枚・本となる)			
明治43年 (石川県山林誌より)	製作者 生産額	白峰村赤岩・市ノ瀬・三谷で30名 平均 680円 大 800束 (1束は10枚) 小 500束 (1束は20枚)		
明治43年 (白峰村史下巻より)	輸出	越前方面 10,000枚 500円 加賀方面 5,000枚 250円		
明治36年 (白峰村史下巻より)	輸出	1,200束 (1束10枚) 600円		
大正5年 (白峰村史下巻より)	コシキ作りを副業とする農家	20戸30人 500円		

今庄へ、石川県側は鶴来・小松の荒物屋を 経由して金沢・小松・松任・大聖寺や富山県高岡へ出荷した。

コシキの大量納入先は鉄道局（現国鉄）で、北陸本線が明治 29 年敦賀・福井間、30 年福井・小松間、31 年小松・金沢間が開通以来、冬場になると駅構内やプラットホームの除雪管理が不可欠となってきた。鉄道開通の余波は、山間僻地の林野利用にも及び、河内三ヶのコシキ生産に活況をもたらしたのである。

### コシキ作りの労働暦と仕事慣行

労働暦 棒小屋でのコシキ作りは、2～6 人の組、とりわけ 4 人組でおこなわれることが多かった。組の編成は固定的ではなく、かなり流動的で自由な雰囲気であったという。

1 年間の労働暦をみると、家族数の差により二つの型があった。家族が少なく村で焼畑や常畑、養蚕にたずさわる労働力に余裕がなく、男は仕事の中心として村に逗留しなければならない時は、農閑期にしかコシキ山へいけなかった。具体的には、夏蚕の上簇期が終了した 9 月祭り後に棒小屋へは入り、翌年の 4 月節句まで仕事をした。この間村へ帰るのは 4 回で表 5 で示した。

家族が多いと労働力に余裕があるため、村で非常に忙しい時だけ帰り、棒小屋で長期にわたりコシキ作りをした。棒小屋より村へ帰る機会は表 5 で示した。

表 5 河内三ヶのコシキ作り労働暦

月	人手の多い家	人手の少ない家
1	内報恩講で村へ	
2	1～15日まで村で正月、16日山入り	正月は村で、16日山入り
3	9日山祭りは山で	
4	春木山で村へいく時もある	春木山で村へ
5	節句に出山、すむと山入り	節句に出山
6	焼畑の火入れに村へ	この間村で生活
7	春蚕の盛りに村へ	
8	夏蚕の盛りに村へ	
9	18日祭りに村へ、20日山入り	
10	雑穀の収穫期に村へ	20日山入り
11		収穫期村へ
12	9日山祭り村へ、親鸞忌に村へ	9日山祭り村へ、親鸞忌村へ

9 月祭りをすまし、棒小屋に出むき木製品作りを始めることを「ヤマイリ」、初めての棒小屋での宿泊を「トマリツキ」という。トマリツキには、自分のネドコのカクゴシ（図 2・A 参照）に製作道具を置き、持参のボタ餅・酒を供え、山ノ神に明日より山を荒らすこと、仕事が安全であることを祈った。白山麓は真宗が盛んで、信心の厚い者は、手製のブナ板に墨壺の墨で六字名号を書き、朝晩拝むことを励行した。4 月節句前に、棒小屋を出て帰村することを「ジャーマ（出山）」というが、トマリツキのような特別な作法はしなかった。

棒小屋の仕事は「シイハン（四半）」といい、4 日半日仕事を続け、半日休むというサイクルで木製品作りをした。半日は骨休みであるが、実質は鉋・鋸等の手入れに費されることが多かった。遊びとして近くの谷川で、岩魚をとり副食にする程度であった。

冬、乾いた新雪が密度濃くつもって雪面が固くしまった時、昼間雪面の融けた水分が夜間に凍って固くなった時、雪の斜面は歩きやすくなる。このような時、村の留守番の女達は組を作って、米・味噌・着替え等のかついで登ってきた。この仕事を「ハンマイカツギ」「サイカツギ」といい、帰りには

コシキ・鋏の柄をかつぎ下ろす「ニダシ」をした。中コシキは10枚を1束、子供コシキは20枚を1束にした。冬のニダシは5m近くの積雪の雪道でもあり、中コシキの時は3束約7・8貫を女の肩で運んだ。ニダシで残ったコシキは、男達が4月節句前に、テゾリで雪上運搬をした。

衣・食 積雪期のコシキ山の外仕事の服装は、上は木綿の綿入れ、下は木綿のももひきで共に黒っぽい布地が、日光・熱を吸収して良かった。一重のももひきは寒く、つぎたして二重・三重になったものが防寒上良かった。だから棒小屋のももひきは、新品のものより多くのつぎ布を幾重にもした古着の「ツツレ」を意識して着る人もいた。縫い糸の繋ぎ目が着衣の外に出ていると大変であった。繋ぎ目に水分を含みそれが氷化してカチンカチンの氷の玉となる。氷の玉が、何かと接触すると砕かれて、縫い糸が切れ着衣は弱くなっていく。したがって、冬の棒小屋の着衣の縫い仕事は、糸の繋ぎ目や、糸の終りに作る糸玉は、着物の内側になるように、女達は細心の注意をして縫いあげた。

手にはテオイコテ、足にはキビシアテ・ハバキ・ユキワラジをつけ、かぶりものはワタボウシの首部分を手拭で締め、雪が降ればヒノキガサ・ドミノを着て外仕事をした。

食事は、村ではヒエと米の混ぜ飯であるが、混ぜ飯作りは手数がかり、男手には繁雑なこともあり、棒小屋では米だけの飯で、各自が自分の分を炊いた。副食の汁と茶は共同で輪番制でこしらえた。

3月9日の山祭りは、山ノ神が木をわけてくれる日なので、できるだけ早朝より仕事をする作法であり、対するに12月9日の山祭りは、山ノ神が1年の納めとして、どれだけ木が伐られたかを数える日なので、山の木の数が足りないと、山仕事をしている人間を木として数え、数えられた人は災難にあうとして、村に帰り仕事を休む作法であった。

棒小屋での木製品作りには、幾つかの禁忌があった。原木は八尊の日、大寒の間に伐ると、木に虫がつくとして伐採禁止であった。幹が二俣に分かれ、それも2本とも同じ太さで育った「フタマタノ木」、同じく三俣に分かれた「サンマタノ木」、さらに幹・枝が互いに曲がりあってちょうど窓のような形をした「マド木」は、山ノ神が山をかけめぐるとき一休みされる木として、伐採禁止であった。

## あ と が き

新潟県津南町(秋山郷)、新潟県湯之谷村のコシキ作りは、いずれも村から離れたブナ帯に小屋掛けしておこなっており、河内三ヶの棒小屋でのコシキ作りと同じ方式である。

秋山コシキは、降雪の安定した3月下旬より始め、湯之谷コシキは、ゼンマイ山が終った初夏より10月下旬まで続けた。河内では9月下旬より翌年の4月上旬まで、いわゆる積雪期の山中で、コシキ作りを営むのが最大特色である。厳冬期の低温中での仕事は、独特な技術がなければ成り立たない。例えば、割る時のイタヤカエデの矢の使用、運ぶ時のマフジの蔓の使用等がそれである。

河内のコシキ山は、国有林、共有林のブナ帯に位置する。私有林は、焼畑用地として利用してきたので原木が少なかった。コシキ山も良い原木に恵まれず、2・3年で移動するという木地屋的移動をしながらのコシキ作りなのである。この棒小屋の移動について、赤岩の加藤正信家の例では、昭和2年より11年までの10年間で6棟、戦後22年より27年までの6年間で2棟の棒小屋を建てている。固定的な稲作農家には、予想もつかない山地焼畑農家の木製品作りの実態である。加藤家の棒小屋の移動は、図1で「K」印で示した。

河内のコシキ作りは、第一に原木に恵まれないこと、第二に木製品作りをする焼畑農家は、山林地主との経済的・社会的関係で規制を受け、その結果製品を山林地主へ出荷せねばならなかったこと等の理由で利益が少なく、打開策がとられるようになる。生産者の中には、木製品作りをやっていない他村のブナ林を探して、県境の分水嶺を越え福井県側で仕事を始める者がでてくる。具体的には、福

井県の石徹白川（現在は岐阜県）、打波川、真名川の各源流のブナ帯に出かけるもので、「タビ山に行く」といっている。三谷の鈴木与三松家のタビ山の棒小屋の移動は、図1で「S」印で示した。

河内三ヶは、赤岩・三谷は廃絶し、市ノ瀬も廃絶同様である。『白峰村史』上下2巻や民俗資料緊急調査報告書『白山麓』（石川県郷土資料館、1973）には、なぜか河内に関する記録が、内容・分量ともに非常に少ない。この報告は、廃絶焼畑山村の記念誌としての意味あいもあり、コシキ作りの生態的記録には、実名で書かせていただいた。消滅した河内三ヶの焼畑山村の実態記録が、この小報告で幾分でも達成できれば、これに過ぎるものはないと思う。

調査にご協力いただいた木製品作り体験者・情報提供者は次の方々である。末尾ながら深甚の謝意を表したい。なおこれらの方の中には、すでに故人となられた人が多く、深く御冥福を祈るものである。体験者・情報提供者氏名（敬称略、明治13年生は明13と略記し、最初の地名は河内三ヶの居住地、次の地名は移住先を示した。）加藤喜八（明13・三谷・鶴来町）、加藤喜之助（明19・上小池・勝山市）、永井辰若（明18・三谷・金沢市）、加藤勇京（明29・赤岩・白峰村白峰）、永井喜市郎（明33・市ノ瀬・白峰村白峰）、加藤昶（明34・市ノ瀬・白峰村白峰）、鈴木与三松（明34・三谷・勝山市）、林七蔵（明37・三谷・金沢市）、加藤正信（明44・赤岩・鶴来町）。

#### 文 献

- 天野 武（1975） 白山山麓の除雪具—コシキを中心に—、物質文化24、立教大学  
池田 享（1978） 越後湯之谷クシキ割りとその用具、物質文化30、立教大学  
石川県山林会編集（1911） 石川県山林会誌  
加藤惣吉（1973） 白峰村の生産・生業、『白山麓』民俗資料緊急調査報告書、石川県立郷土資料館  
白峰村村史編纂委員会（1959、1962） 白峰村史上・下巻、白峰村  
橘 礼吉（1984） 石川県白山麓の出作り住居、中部地方の住い習俗、明玄書房  
滝沢秀一（1971） コシキの製作、民俗資料緊急調査報告書『秋山郷』、新潟県教育委員会

#### Summary

Snow-removing tools are the necessities in the snowy area in winter. Before shovels were popularly used among people as snow-removing tools, Koshiki made of wood played the leading parts. The villagers following primitive burning cultivation at Kawachi in Shiramine Village at the foot of Mt. Hakusan in Ishikawa Prefecture built their cabins in the woods of beech trees, of which Koshiki was made during their leisure season.

When good wood for the Koshiki ran short, the villagers built their new cabins in the new area every two or three years. As the number of good beech trees was decreasing near the village because of primitive burning cultivation, they moved to the farther co- or state-owners' forests 1000 meters above the sea level. Thus, in order to make the Koshiki, they sometimes went over a watershed to the beech woods belonging to other villagers.

The villagers had to carry up much food before the snow was piled up, for their cabins in the beech woods were buried in more than 5 meters snowfall. The villagers following primitive burning cultivation borrowed food in advance from the landlord of the woods and gave him the Koshiki they made as a barter. That was why the sale of the Koshiki was monopolized by the landlord.